# 扶桑拾葉集

廿九／上

勿

太政官文庫
和書門
類 三二三四五 號
函
架 三五 冊

内閣文庫
和書
類 三二三四五 號
函 二〇四
架 六 冊 三五
（〇三才）

212

内閣文庫
番號 和 32345
冊數 35 （30）
函號 204 143

共廿五

国立公文書館
National Archives of Japan

国212

国立公文書館
National Archives of Japan

# 扶桑拾葉集巻第二十九上

目録


東山之春記　同
湖水之事　同
西山之家記　同
清夜　同
春山之夕　同
大井川道遥記　同
九州巡道の記　同


豐山陽僧

# 扶桑拾葉集巻第二十九上

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

## 東山家記

豐臣勝俊

ひとりせすして文とうけたまはりて文屋のあそ
ん忠さうしをれうりとせしとひとりあれて
ゆゆしきの山ちをしたうあるとよりて
なをしかの山ちを思ふもいとうつくしう
世をうりすりしらのとをあるとちう
るをあぬ歟つとりすれば極楽をすすめ
度よあるをそれをしるとこと

うしやかはやものの八すえ三ちゝ先を
人みくるふうるゝはゝゝゝゝ人あ
ゝをすてゝ氏のうゝきゝ人のおさ氏
いるゝうりをやゝくうりしゝゝや下宿ひん
ゝ山のゝりゝ是山ゝゝ不よ幽居の地を
ゝひゝゝゝあり松のゝゝらうやゝまゝ朝
つくきゝやゝいゝれゝあるぬゝゝゝれゝ
ゝゝゝ無ゝてゝのゝやゝのゝゝゝのゝ
紬ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝ書ゝ但不ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
幽遠文二ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



ゝゝ社か淡ゝ持古人の和歌おゝれ
ゝゝ白紙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝねゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とわつめとさてゐうそれとさとるまむ
よ。はのくそろゆくまさくの所をいと
わてゐうちゐまるとれたもわうるやまさ
代くのすつくさえくゐんとうせくまくゐる
集ととも奇合のしくくひりのくらうしみ
ちれくいくくの集とまとて二百六十紙
よとよつり志りうちうちのりてわそひ
りのくくちろとをれうるうくちとすて
の和てうとめくわうるすりとむとちなか
れしどのつくゐ琴一張くの文つくえひ
しつおるすう硯まんくゐ海もゆくゐうす





ろうるすてゐのおうよ唐人わられるう
紙とおりくくさとありうくのくは未央
文集園の月とうやいひうと祭うをせ
しするもも流よくくくを持ちとお
りへたいうりてとろうれとたろうのて
わととまれうはもあれはてろうる
くもくのうくすわさやうるうとみうは
もへいたるすさまりおりひられ
ぬゐいはくら〇ひとあくいなくす。楽とめく
わうさてうれ物さうくういすとくとて和すへ
くいうくとうそへはくすくさるるわくす。

まへよりかはりて花曙樹とうるはしくゆ
く春百さうあまりとしとく藤門の鶴風
をきこえすしもあらす家をうつして竹の
をやしよりうつる夏いすくしてこうとこと
めいくをうつしてあるすくるのうせ
よあるこをとすすむ新樹の梢よりはるを
こそ秋をいまつるたれをとおりひいる
るもの山のうひわりてあるゆ秋いわるの
うらるしよりそろうとうけ花と実と二度
をそやしまのなかりはとくしだれ
をそるひすをそるといるくまつれく



るをすだをそ来拍のあるしむをうり吟ふう
ゆつくを書とし藤のこゑあそれよ山田
のひをすをくをゆるるをとをへくをし良
還流所うやくをとをいてるるあけんいけよ
とのもうれもかいけをんしおもひく
殺すよるををたるをぬ秋乃をるり
をろをうををめるこの書ふくをして歌
ををといをくをちするる園中のちをと
ををするるをうちうめるる鶯をとをふく
るるのこをけりすりをけるるくをんて
人いるるををすいとのるを夜のれるる

あらんとつきしいうるせさるる
ゆしあるとまのとをきあるとをとをとろ
むすへしいアーうの新編り高く村高出
まるうしーとさまてるとまるとまるうい相なる
くをさうりぬとおかて高もせをるり
明そいまよをうしけるうやうくちりしを
るりみちのあとをきをえまるり絶内面
あくはてたの風ゆと言のみりまをてる
されて高地よ撫らるるさまるの者ぬ
内をあり出されせるるるとひめせるる
をへ也おいまれの細をとあの紫ようう

れいくへ人有なきよ者をへいうつる
りるる精ものありをほうのほとるべ
をるみ西弱をるるをけさあとれ
てとれるるているわるへもあるへをゆ
るをのるやうるる彩のいるうむをねれ
てといるうのすされとけるるる
ちすぬるるのいる彩のるるひ情るく村てさ
ひくきるめきるるいるんるる歌る
らつるまとるる松の出けえとひるるあり
るる雅はるうるるのよゆるまるるる
くとなる海るさ山歌めるるりかるさ

ちのうら燈のうせよをそうひてなひさ
りよやうてうすをたのこうかうさうら
うるる玉ひらりよ源氏のやとけひと
わ小河のうつさをもうりうとろ朝な
く雑のそうひとうめ宗ひすうさるる
ーふうめうを面すやうるるこのうるう
うくうこうすをうれるひのををうとろ
あくうれをてうすをうの田舟よ
録せうとつこ邦面のよくうるひう
彩うう邦よまくうこうんうるいて
うろうやうくう燈のうひををのこて



うをうるうやうの人の役をうあうくうを
の人うのううろううをゆうはうあか
うう燈ようううううのうをうを
ようをれいれうくうるうをわうるつをれ
ををれうるをうのうつうませうるうふ
をうのうらぬをのあやしをはうはゆし
くてをうようれのうをうれうれいを
うをうつをうるいくうをうれうかよをうる
おうう宗うるをうをうのひあうれをうをう
をうをうをわうつうをうをいてけうれを
うをうひうをうれしはかのうををいをく

うすをてをすて明の月すてしのそれのほと
いとそんなるよ者のさそをゆあるす
風のあまさそ雪とてはのとゆふよう
らそるそさきそれゆんとそそう
しるめそれつきのようひとけそ
めしもけさそわすれぬくさゆさてう
えんといふ人まわるゆ絶てくとものうや
とりさそれさりそりとおりのよねさし
ひつしそれてよちいさくてそる居
わりそのそさそやそりましいのもれ
るんそそれけるてまのまそのまそるあ

わいまのしの人わりはのそれそるそ絶て
れみしもたそくそんとわそれるまた宮と
宮亭そんす新とつぬそる松みそ半
まそ若よのそわる竹のかそらんわり松と
すしてあるあやれた京極中納言世との
れてすそ絶小倉山のうとも山有
そそそり見まそされてむりれ松のも
しくはをまのそるはそるあそまよ
もそへしかれ山若よ松そるぶしとれそる
百首のそと見れいはねくわ上古の風神
のそるりそそうんそひそけそるそて

そうとのつうとひねんがすうれい
朔日のまつりふし三十六人のあそびあ
ひするよいてまちあらすして像よりは
はしそうりうとうりをとりけうしいあは
うれしうゆくまてよ弦のしてちきてけり
の墨付うせくあすつるきてあれいまれ
世よりつくへまはしてねねはうさあ枝一
ほよ四人つりいれ京仏堂をまてるけ
しのうそよとのくとれとけつねちまさ
そりへの墨よそうくつれりの待必れつ
九月そうとむとうのやうの又とうせ

す成すそりはしうは揚よのうりて月と結
事そうしよふあくそいておう
それも結よのうすあり用れとあうそ
おりひいてくいのるへすして世月よ月
そうそれなうそよりてつけてうるぬ
きそれあそれとちおりひいてんまの
るうりもつそうる月のけとはくして高
繁ふうへ松れ結よはとさとりわとそうそう
やうまゆいうそうあそれうりのひん
うよ枝千畝の国とまうくうりはすさ
面ようへして郡生う九とつそていとうり

うくわうせをまつ主譜菊の葉とうへてい
ゑとむすくすすめらそひとそるよもさ
けうとをさしとめ松の龍はゆうるけそひ
のうやうをうけひの水をくくるうてるとそ
世の外てあそうめをとやしるのはさる
るつはうけとを奥をていとむるうう
ねとのむしとん家をうておはさうと
しさうれいるふけむとうを移ひくやと
めうはやしまをうるうをしなれをひうを南
の窓はうりのくすをとやうはとすう
つ正右軍う石すうのはをとうはまの



そねとうをへうとくくを真帯をうをせうと
れうをてるを沈うをうはをけしいをうは
紙帯をついやを結をうまかをしおは
うわ帯を末をんをてするを家のををあるる
ゆへへ家のむをかるる朝をるはうをを知を
むをはあれをうひをしやまのをひえ雲青
のすをを時のまを消てををれひく意及を
ひををるをり月のをうすくをかをうけ
のをへへをう窓のうをいをんるををお
わくいむををけん巨樂のををうをい
ひしへををうをやまをを十文重まを

やまとうたいつくしゑ琴ゐのこゑわやうまとさとまたくねとみるふるくさむ
こちをれいとひつまくてめさるよとりすさのわくとのすこ琴
うたすゑ琴よ君をのひさへり松せん
ふし、ゆ、なりつ、狼みよ化して神の大
佳てう、琴よしてろるこ我とも
いとよやわん、結い絶いまるされう
晉の徽士琴の琴よ似こをやとる
てくも徽のこ名とさりるけるう
へ、ひうねとくへうといひけんへのこと



とまつこうるすおいあくころとまさうよ
わすす香いさくすこきふりひのるる
やうるもけこうするうちふりつそて
けうるすゆへわりて絶とやこうすの
るうことけてさこるものれを氣むすの
れりのむうこきりいるすす一粧とさ
しまるすこうやくこ山里のわれれ
いひつくへさよるわねこれこうこ
りひくよ靜ること業こ安きとこく
してこてのあうこうりあるやこと
まうこへこあて百里ろ年とはくく

こゑをけんし

朝ほらぎ

同

常よりすじ雨のふりいでうらやめんぞいよ
いよゆめの松山のしめとそこるわりこそうの
もりけちくておもりめくりて南よりこれ
れそのしるくいあるよりさまつりよいそな
とうけてこうひらくつまつ屋たりよの
そうよくいそいぬのるこもしこんん
つよていきうのくこちすへすくく
ゆよるとこるあわるとゆ子とめ池めけう



ようこうよこかいつはこるあとやふ
あひ紅ろこるて紅くさうるるようこう
のこいつ四つこいつこいつ一つなくさいくこ
ゆもおわるあひてゆきこゆなのめようまこ
ふそりもりもとりこりて新先生とこうひ
つ松洞堂よのかれこやこの書いて一
村のうすこうりて大はの正云ふ表示
ちるてなうめこりしいまもうこぬおまう
けかれとわこれ幾のゆうこ明こ
りうこねこるひひくこの鈴りられぬ中
よすひこん人こそ。さゆくあつまりのこう

めぐりのわうにに水よりいとれるうろうる
をーやうつふかるつーもえのつとりとるる。
枝あるとうれいつーまいいるめーきうらやまさ
のおうらわりとうつのれそうーくもいつ
ちらぬるるそるまくくいまよくわりけ
ーまちーていあーるつきくぜれうそを
いーまよまくつくーしーちのとー車のくま
ーつくーいさーとい尾よーきそるきるきけう
ーとのれよかとれうもうゆーとさくー
くもあるーぬうりのういのうまれひうも
ありとかいよるるあうきれーやとくてく



いつくくるあーよ出生たいくおゆとまの
るくいくく枝うれつく枝とけといつるこい。
けよつけつ山のくまよとめうりあそのこと
ふ男とそれうひいるくくーたちーやすみ
とりてまくよりーさうの和れとけむせるよ
わむーうれのるかとたるひきてたうひき
あまるようれる花波とすきそよきて
るとうちのりてあーれまるやあうとて
ろよーすむそーよわうほくよるるる女
みとものをひきぬれいのひとそうるうく
うさうれりーあにてゆうきれいそよるる

かりあけはなすとうぐいすのやうに
ちらしまきれほそくわりやうよりくいてうるく
さけいとつるやうあるきとゆりてもーよ
うらうぐいすくとられ
られるをういあつめて葉とそよりうるもの
をいゆるとふうすとうてとくとあて
の雲いをめりやあるまき谷ちうさのが
せうらうひすのこゑい耳をわやまるへく
もあるぬーまつこの柳のうちうれをを
春風はけつるちらをするえわるぶちん芸
せたるくとうちうのひきうすをやきうる



ひもものさしつもあるうはしいつを波をう
なんいとゆうるよそとう移るもとい元は
きてうをのをおちううさるを屋内
けあさてこまうあいひ半てんい秋のーを
うとうくもわうまーー花のひくへのうと
音のへりとさけへしひ移りすのをつて
をつみをうらてうるうすれぬへー
うれくあのうとうそるといひくお
るまのよむすめの四つをうるあよ
るくふををーーーて悔とのあやまちすへ
しさいおつをぬをのそよあていけうくそ

おほゆれるをりてそすてもとめ
わるいけすてたきつくのようりていて
るーとうわつてしをあるとておやうなねえ
しをわつりゐ根をつてよめりわるといきて
いれるまもぬるーあきてちとのさまへ
よをとまるすうるてもあるれてうけるそ
ひてとおやようれしきやあり
めれをのてろうしてあれをれつ
まーきのなれやうらんよりてる
とうけをとーまるとをうきそめ
ふるやつしをくいるとひひる

るをふてつさいてうへれのふるうり
ぬるりをいつけさりるれこのゆをへ
をゆひくてれるをいとくあうすちれし
く書り充うれとうちつやさてさてる
るふくれとやすをわいをよ思ねうけを
山れ書ようまをすをのりえとけうる
むやうの月こいつりやーくあれつ
るきをうつゆきのあーみれそをよの
ひーめをおそぬなるへーいりーま未と
りをうつわくひをりの花ををとうつて
おるーをのをせしるきいとりのうる

れ

しかるに延の末に成るまけおちて
東ふきに花は月まちいろゆ
ちるわかよまてなりぬ月と雪の
なくもとゆの秋くのうきは
やこの世はすきとてすは月けは
ちりてまつさくはるとうおとの
とのいいひいひやうひかきりの おめれとおり
よ雨れるるさけとかいのとすくあり
あもあてるひくいひつるよりもて
わるくは月とすくは月とあて



れすんとのちもたのひあるや春たる
あたれるらんとはちとのひあるのひくやくへる
そひとのちもとのひくやくへる
さとのわさからけとて

西山家記　同

小倉山乃麓より蘭若あり勝持寺とうけ
る道風の額あり宮吏の筆
あり人命といつる老木のさくら
ありしちおまるの桜のさかりはまとわ
すきぬとるとくへもむしおはえてなさ

けるゝ。ゆるし給ふ。此僧恵海やつれとゝ
き逆院とゝさこと物ゝ大ゝと世界をゝ
ゝ。ゝりへは勝地とゝ。むゝ。ゝとよあやゝき
物ゝり。根ゝ文ゝまゝ。ゝよわゝれてゝみ年ゝ
ゝゝ。ゝ法ゝ。ゝ。ゝ。

うひけたりてやうてんすることおく
うしろまくらつくひうるのいなのよう
石軒岭泉の落葉墓地部いひさるる
よりとすりとうりのうとうとうとうへいと
まるくるりけさ身あれた雲みのようそ
よおうひやわて偏るもよおまぬ蓋の
ねうわるもあるれ寄りさくとうと寄すると
るもの能すくちうるるとうわとうと芝をうさ
ものうきとうとうてうりうるの用のはそき
ひうわる秋れ末るのらうけうてうる
まうれうる庭るまううさるとうれうひうさ



れるとうとひるてあうるのさうよへけ
ものせす春のまるひのわさ秋るてけさ
うれるすうれるめまれようるれる
秋ようるてうらいうるすさありさ海
いとくと奥あるおのうてるもあるれけつる
れていうれうる寄のれうるひまうす
秋さへ石のありあへるい張し職のちる
まるへうりのいいうきうく王云懐堀の
楽からす野寄寄のあれしひうけうり
とをゆうりのうう秋いいうくのすきお
るうへて山のううつるるうう高の丸寄

とつゆけき萩のうへにあるとうきて
ろといとまもしめぬるかへの立うへひしるとと
うへよりもておるはうれの花と雲のうきき
一ゆとうてあそうすとうとうれしむり
雅すとうとうのたうれさそ松とうそう嫁
やうり花なへ秋うとうとうおうめうて云。
ひ来のうさんもうとやと蓋乃事
とうへひ事立ものうちたうやうらうて。
言おるもけよ咲うとうむおりはけうさうん
世まてわらさううのわうしうすう
うと笑とうへ猶てうとうのうるあり細



岩河なうれて強と笑とひうさうう後へ
盃とうへひすうひしてうまあうすそへ
言乃朔鄭繁う瀾稽のなとしうひ。
うあれとうひなうきけまきれよ
ううさうるの蓋のうきいうれうん
いうやうもさく蓋のわけはの
伯思し弥なのうへうありといつるまうに
しうるわそのうへうおよいうてたうの
うもううまうひいうん代く
のうん蓋うううこのうとへあれうとうせるうう
うす。新古今のうるはひううとのううけ

俗若れ、りつ、しきも雅こもいひてさ
うん秀逸をわつらふ一文字ばかりやうな物
くぬとゝおろすへうす。はたの花鳥を
えへ。まして同じ時の書きとや。京粉美門
の書とうれし。弟はりはとこれうもんせむ。
わるうしてこうとゝむへ。世のへのよむ歌い。
偽りわいてとゝのうわり。面白うあわ
まねく俗ゆ。めこう。遠の海山とへてこう
不のまこうりいつ。云ばはまうせてする
こうこうこうれも。ものつらるき風情
わりの初句わ。古畑のそのえまうすめる



遠の麦ふよ新のはすこぶよ久言。うう〳〵
んこうれ和歌たすむこうこうさよわう。
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
す。市こう移とめすこ蟬のつくこうこと
のむりのはるへこうこうこうこうこうこう
こうこれまうこうぬわりて。へとおこうこうこうこう
へまくこうこうこうこう立まを貴すこうこうこうこう。
風雅集の中こう。京もれて其すこうこうこう
こ月のはの風はおこうこう蟬のひこうこう。
わりのまこう乃家和こうこうこうこうこうこう

も人のいまさら保せうすることはあまり
しそれすら水とゝを易ぬれば水茎清き
石よりそひえるる石の苔乃衣ゝゝうへ
めるさうるゝと雲とゝつく僧都の衣
りいとゝ門まもるゝ清みゝゝ
えやこゝつゝいとゝつゝさゝりとゝつれ
ゝとわりゝうゝしろはゝそゝゝゝ
くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つゝ雲ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



すゝもあゝねゝゝ雅乃ゝやゝゝとゝゝゝ
岩根の苔の衣ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちてゆくまろひるとしかはよりて言い
あとの樹といとなつかしき雲いへるの離と
つらる虹のうけ元よりわさしうるう
させぬ具とも諸国よりすうるさうほ
とさうの思ひねまさうりてまれ
ておもひをうけぬといひけむへてて
ろわさくや鶴の長明うれむ仙
ともはかりうるすうふうめうや
いちんかれむ八十年をうぬ光の
紅葉のうちもまうまれすうれ
ち歳をしくうちうへ



してゆくやわけのうへむのきみくま
ひいせんといるてそおられれ家よ
さしへ月のちろはそう山の猫ちく
のそれうもをとを身の齢よりすへさし
すてよとのれも黄うう泉の人うれを
あわやうひようけふまらよいくわて
れとおりそうんそよさのへ栗山のの
山陰よ松乃庵とうめうへ大原野のすて
この田井よ根芹とつひすてうむて
や蕨いまやうついまやゆめひしやうり
ちすす花園よわひて胡蝶ときます

しらやまりけ者

さう衣

同

山よ山羅よへわ〳〵す。そやこちらくていさうが
ひとへ〳〵つとしもかなきこそ俤しそれ宿
と富ぶ〳〵よへわ〳〵す。俤わ〳〵て者よか
しうまし〳〵きこそうひしそれさうるいよみて
奥のよつのこりもとのすうすやすくもうが
さう〳〵く。書根うこの乃言み遥りこのり
う巻根のこ〳〵らうとなわこしひわし。
ちうちうきうくれ〳〵ゆこしおはうる





分よんわ〳〵まし〳〵のゆいこうひてのこそ
けぬそうちゆきこうやいくそのまれとむん
てしるこ乃ゆすこそめけむうし門い
さへうるこ道もあきまてしこうわへ遥
う根もんこさりく。すこ根く秋とかこ池の
水まし庭もひこうよのことあれまこうこ
れよるへうぶまつむしの言すこうこうて
てあくすひしのこ言いこうりゆ乃
こそうんこうつゆけきゆへあわ
こうわ。ゆこうきれこうれしこうあれな。
しのこれんものこうよるこすはうて

ゆすりてさけばとゝいてとりわまれる
もろわ来ハ雲よハるゆりゆゝしおりしてゆ
とよるゆへしのゆへくるゆすくるすよるゆ
とゆへもあれと鶴の毛衣とゆひそゆれ
あへるゆ乃仲よりゆとそくさう紙乃端よ
もとゝいつけてゝ波ゝしめゝとせ
うそくすゝろさそうやせゝとゝ矣
へゝゝさけ乃御のゆのわゝれいつらいよゑん
是いゝれまてうきのよるひゝうてい
ゝつゝ西家乃ゆゝゝおりひゝつゝ部よ
まゝいそくつゆ来れ乃ゆゝるわる

きみのゝめゝいつまてゝきゝ
東方来明顛倒衣裳詩ゝいひゝめる
文ゆやゝゆゝるゝん。さのゝゝゝぬゝまねゝ
みゝゝゝゝいゝゝ。まゝゝゝゝゝゝゝ海
よゝゝゝ家の年ゝ沖ぬゝゝゝ道よいゝく
ゆゝひいゝゝゝれゝれ裳のすゝゝゝ裳
ゝゝゝゝれゝ。非今のゝのゝゝゝゆよかゝひ
てゝひゝゝ忠のゝゝあゝゝのゝ海よゝて衣いゝて
う素ゝのゝゝゝれいゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれゝ鄭ゝゝ
ゝゝゝのゝゝゝけゝゝゝ。ゝゝ衣一衣ゝと

賢臣

きよ[illegible]ゝのこと[illegible]ゝ[illegible]おりひい
つゝれたゝゆゝくゝゝゝていてきよいてゝるお
ゝゝのやゝて袖ひ[illegible]おとひとゝゝれあゝい
ゝる霞やのいゝゝきよゝゝゝゝゝゝゝるれ乃よ
ゝゝよ為ゝゝけいゝゝゝれすゝきゝゝう字ち
もよゝゝつゝれすゝゝゝひゝゝゝゝくゝけゝく
もゝゝゝゝすやゝゝゝぬ殺関白おゝゝきお
ゝゝゝくゝ信ゝゝるゝゝゝけゝゝゝゝゝゝ
ゝ法明智のゝゝゝゝゝゝゝゝれいひゝん
おゝつゝれゝゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝて
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝは食ゝの



ゝくきゝゝめゝゝいてやゝゝられてゝゝゝ
かわゝん歌ゝゝゝてゝんゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれゝゝゝものと書乃ゝすゝのゝゝゝ
ゝゝひゝゝゝゝくゝれほゝりおゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝ乃軍ゝゝゝゝゝゝゝれ
ゝほゝゝゝゝゝ義嘉乃わゝゝゝゝゝゝゝゝま
ゝれゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちうこくもまたいとうあほうあれ
は神をたてまつる人をまつる者
はけやうはかくとわゆゝしきさま
武芸やうはてきうはのうさうい
とうのうれしるいて腰のわきてまやう
よりとるもこうたちもつくせお
りまする さてはは寺いうはたうみうき
は射あまくせらうそうけんあんとあ
わはうはうらつき猪そんうのよ
うへうひとおうまさぬとはそうれ
うるけさやはする事ぞうとい



門はけしひたるとうあんぬ音色おうひ
やうへうれもものつうせとうあす
漢の言祖はうさうれ敏とたのさはせ白
ひはのそうへはへ大はおうてうひぬ
まはあるく事いえそうあうゆます
秋畫はつさうのとそひせれそう
弱とそうとうすとそうへ
あへ恨の関あうくやうと忘あい筆
人の藩たうく沖れ鳴そはの雲野
るの海もはの夢おさまりてまうう
らもうさのはは氣長足張のひうはう

つり、義よしてうまうてぬうつさか
してまういとんてとるこまとそれは
門きとうめきくうすくくきえうき
うるゐ軍に付よはうとを沼物とるけ
つきとうりまのとうのさいおゆうを乃事
ふひんうんうとのうて中納とそ
ゆう御婿乃飯よそのまうけしつれは
ますまおい仁渡乃ひとのはわとうくうま
みうきのつうおの基い置よてうくて
むうよ面とまうくゆきかとるうう当りて
めーあれまいうぬとうすとうら樂



ゆてとうとうとうて角うと面くくみりの
者いくいとうもうやうめいうよそひうめ
つううよとうれきりのえるくーが乃夫
納言利家卿前の中納と秀家侍従事
相中ゐ行後ゆうてすくてわまとゆかれと
れらつつれとくいとよきうくくうう
うまくいてうおまよてうとかうねえと
いとぬ錦のとくーとうのえとひまうて
はとやうるう藤たうまのせいらんと公
とおのまに射ゐ面とうまのとくせめうゆ衣沾
当乃石倒ととくとえとうら和とい

とてまつるとぬ無ありぬ所乃ゆ之のより
て産りつゝて産りつゝてまつわりのたゝよう
すれたゝ心もとうてうようてこさいてうんて
とゝ我ひるゝ心乃ゆ所れわやすゝき常
ゐれとゝれいゝ是しかなるまめうゝうわゝや
ゐ日もとよはゝ鴻腑乃ゆ所れすゝうう
てゝれゝるゝおゆをゝつゝ産主けゝ
りゐうくせうゝのゝ産乃むつひとゝ
ゝまんと稼ゝゐよゝゝわゝゝすゝ
ゝのゐわゝゝゝなるわゝれゝいひつけん
ゝとゝゝるゝまゝいゝゝゝゝうのゝゐ

いゝへの我ゝするゝわりやゝゝやゝ出ん難波
乃ゝゝゝゝりゝゝひゝんゝゝゝゝきゝゝ
ゝ書ゝゝゝゝゝゝの鶯ゝんゝゝゝ横ゝゝ
是ゝゝゝ横ゝゝゝ流腑乃ゝ中ゝゝわ
ゝゝゝ産乃ゝれゝゝゝとのゝて畢ゝゝゝ
ゝわゝゝゝれひゝゝゝゝゝゝゝ産
ゝゝゝ焼ゝのゝゝ民のゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝるゝゝとゝゝゝ所母ひ
ゝゝれゝゝゝ天ゝ面ゝゝゝゝゝゝゝ
たゝゝゝけゝのゝゝゝゝゝゝゝれ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くはとうをはしてとりのそうをあは
めさせたのひとりをのこしてのこさ
まつもとうとやかのはをとうつきさ
てまつりの精進のはをそうしてをりさ
しのもをぬもあれをとけをうをかちけ
うはをとうをかをせうをさまつりをと
すめとめをさおはやけしくをかのをとを
くをのをうをすをくしをうをれをきをぬをを
をとをのをうをかをうをはをうをひををかをを
をををの大臣をうをとをうをやをれをををのを
ををくしをひをうををくし。常花物語を一源院

乃山代のをを后宮をを西御更衣ををうをのは
をりををををををれをは調度ををてを
ををうをををををやをうををををくををくををれ
しは當座の法成をとををををををひをを
れをそれをををのををををををすをををれ
世の光ををををを門のををををををを
をををををををををけをををりををて赤
深ををんをををををををををををををを
せをををををををををををををををを
ををををををををををををををををを
ををををををををををををををををを

おりておとすくさはうれやひさしくめ
ぐりすまさせるくるれ竹乃うちをれ四方
菊のうやとの屏い銀ふ糸をゆすりてひ
きけしるうてよいますはとなるくし
氣とうひとして北斗とうるとしさ
ふようはとうれうれうれの行いて四季
かけうせくうりのうすくさとうて
きこゆをいとくとうくるるまいわ
つうしいはい窓とうけうりさうくえ和ま
屏ようさうるうんあうりうんやうれうる
ふうせとうのううひるるうて丁はとくうろ

うひとうきうりれしいまもむうりがうわ
なうりけう亭ゐりうりやうもての法は色
と人のうくさよ四藏ふうんやひろ
うるひと耳てすうるうるいうてろえ
ぬうるひりうしう
たちうくふうたうれ四ういう
うくうれおはうくのううのせよ
おりひわまれるしのやくされ色ならう
ふくはひうとうさうえうきうめぬ光く
ちいふのいけうひうて

春八山ふく

同

おほうちの宮ぐうりうちよりてやうせいりう
おちぬへきまつのこちすのはおやのい
さめいけはとおほしてひろさうそうそ
れとまよひてろひまさらけしきづひの
ちりもおりろくされぬへきみあく
れちぬるんうとゆやまさとみヌ
へとひとりまゐめておしだのかぬひるのしき
まちてもわんうしやうひのけはわちり
云ねのろかいきすくさぬさちはり
てやうさるつ月のそろうしてるさ波そか



といひてくとおうぬ林の下まらいたんも
まさいとおりうへきよそひるれとそよつも
おをかうへきすちよいわうさうへ中納そ
のきこときてゆうりうの人うりはさうら
れなるふ波とうやうあるいまんわ海の河
のるうるうれうへきよるひあるはけ。
あうしのすいれりひくうるわうねいさる
やひとれきこうさうひのちさ
せうるへいとわうさうしうをのま
せようするへうれすあいやしくまうて
うれいうるくそひかせるきりのまいう

なゝひまおゆく秋のとゝ雨ふるゝ
ゝ秋ぞこのゝくさのゆきぬるを
のむしゝゝうらもすてゝうゝすゝこゝさゝ
ひて花こそあるしとひとりうゝ雨
よゝのうちひゝゝとゝろおのゝあわせ
ゝうわておれゝゝろるゝゝらいす
ゝゝとのゝうちるつゝまゝゝゝれは
うゝれゝるまゝすゝるゝゝ雲ゝはゝさゝは
とゝるゝよゝれゝらゝすゝはゝよゝゝとゝゝのゝ
ゝるゝまゝゝいひけゝひゝのゝりゝれゝゝるゝゝひ
むゝゝゝ

とゝよまれのこの人まちとる猫花
ゝふまちのらいちらぬもすゝ
なゝしひつ夢世ゝ
るふゝるくゝゝゝ
ゝしよいかゝこゝ
とる昇ゝゝゝ
わけゝゝゝ
とけゝふゝくゝゝ
つゝいけ蓑ゝらすゝ
ゝゝゝよいゝゝ
といひゝゝのゝ

のゝそれそのゝとよゝふゝくゝゝけゝいなふ
世ゝれこゝとゝあゝゝゝゝゝゝゝおゝりゝふ
やりていゝたゝゝゝゝゝゝゝ
ひゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝくゝゝゝゝ
れゝよゝゝゝゝゝゝ
よゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ちゝくゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

おもてをてらすくらくてらすまです
けん菩ゆるおかりうろきそたのかたよ
たちやと朔ろひつゝもみてもいつらいよけん
ひさるよりとくへのさきくとくてお
りてとりてこゝやうるかうし道の泊
ちりよるひるきしてへいとりいさひ
みさきゝいつれといつれとわきさくく
つゝもわらすいとけうあうそれすり
ゝとあいもしるやうよるこうと
きかうさすとさうみしきたりよわ
ほうつうりがさうしつあめいとそ

しれゝ蓄のれはと家物ゝうトすん
なとりのあうとたくひさわけさ
といりのうちきつくうそさありくう海
たんのゝまれちあうれけんゝりさ
のりゝゝのきくゝうきゝつてでそ
ちるとれ面きしてつまはさとて
京とうくひいとおうゝ

## 大井河道記　同

山水と愛ゝ歌志ゆゝまゝ
はうきあうまのかのかきり巻九今日

[illegible]の病膏肓よりやまん
[illegible]
[illegible]
て、鉛鉛澤よりあるべき便もなくて思ひ
わすれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

大井川のわたりをもとめわたるに
川ちかく風山みちをとほり戸難瀬の
瀬の白浪をみるに人をれとなれ
にうつるくたすの面白しとかのも
をあらさまいとひしかくなくなりゆき
りゆくひるをてる百うまこいうまをこ
詩人哥仙の書れたるの紙をかけ
ゆるさるるをしかるに器はれ
ぬるはゆるさなすまきらすしいおこの
まうけいとくもをあをはをく
えらわくをかるすの人も



わるまうんうの蜀川にて家居せて
思ふにわかの世の色うんものの
をもひ人うやまくしかるのく
昔兼中書王京極の賦にる長をを
切りつるわるすの茶をかるを
すしかるすひしかをの書流法
長老やんらひしくわれうくく家
乃恵はかとの唐律二首傷歌して
にのいつをくはつりはくをわるる賦
さりいゆさふをくをいくをわ
をいまをやしまいるやし裏いを

寶ものとそやすくわりぬるものをを
つよくるしいまゝ病にきくしるかを
をかすもわれ〻みをかるゝるゝと
てしくゆくく羅さるかるゝて
ものをめりそあれまつるる
うるけるきけるのひと言
ひまくるもひとつわるゝまるし
たまれさくるけるり杉みて
ゝやうゝとゝるわまゝるるに
うれゝはあのゝるゝとゝ乗しの
岩垣ぬるよりり屋ゝひ海し

つゝるるはるるゝるゝれ

九州のゝりり記　同

大相國ゝりうゝひまゝゝ海ゝん
ゝく天正乃末ゝ龍寺御出ゝ
きゝ事ゝるゝまゝたゝれゝ日乃中
の岳のゝゝす信玄自ゝ月の中ゝ
五日ゝ京と物りひ立ゝひゝん
るけるゝ人のゝゝるゝ物んそ朝て
ゝゝゝくゝ二首後ゝひゝらまる
るける

[illegible]

[illegible]

[illegible]

は。後中つかさ。ひの中ゝ。ひさきを
つきくさのわらは。ちくさのうき
草。ゆくはは。はきの花。川ぶくいろく
ゆくさくはは。ゆくさの川。ゆくさよろ
ゆくさわらわ。ゆくさむろの中ゝ
ものわらはらくさ。ちいさき花の
おうよう。毎年くいつる清水なるより。
かれ清水。和月。ちはひゆる
ちるしとるんとの。谷川の名
さ巣巣。ちるものの。ゆくなん
わるとる。ちはを神主の家。ゆく風



ゆくね。望日の。ゆくかゆくも
風。清。春。ゆくゆく。ゆくは
ちるちる。ちは清。大。神。ゆく。ゆく。
やは釜。ちは。ちゆくの。ちはを
ゆく。ちの。ゆくひちる。神。佐。ゆく。ゆく
毎。ゆくひ。ゆくくなる。ゆくひよ
しとる。ちゆく。ちゆく。ゆく。ゆく
ゆくちるものゆく。ゆく。ゆく
ちゆくゆくゆくゆく。ゆく。ゆく。ゆく
なんひゆく。ゆくゆく。ゆく。ゆく
ゆくゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく

まもるとてまりぬるそのほとのうつくしう
ぬりぬるそとよ一ちはゆりく所方の海
ゐ家氣とこゝやまとくちらさつる事哀
爲しもうすしとこゝらさるる母孫まし
ゐかさ母ゐ

つとまもるやうなるのひまに波てひ
ちくい清る舟のしもの波
さ母うさよみひうふうれ
し感しくちまとうさものさかさく
ひてもろはれむろのおいてよ
まわまくよりるいりそそれ



孫とくりうれもむしうしさのうう
わうるつとひつ人とまくさかな主母人も
うもとくく孫くさかさ主母人
さみうとは之とまとの孫うわう
母ゐうさ人もうとさけいさやさ
母へとへくくうんとうかう
母事まとくるみうるく
くはのよ母るのみくをりる
ゐくくわう事もわみうさなく何
事もひにうりゆくそりの母
ゐくうさいとれそうう主母人

わりなくて、ものを思ひつゝ、
ながめをるに、夕月夜のいとあはれなるに、
ものをかくやうにて、
いとはかなくて、
月のかたちのまことにあはれなるに、
ものをかくやうにて、
ものをかくやうにて、
ものをかくやうにて

おもしろたのもしらとして所をあらそ
のりくおりしもうき浦にうき藻をか
なくこそなくこゑもこゑもこゑ
のこゑもこゑもこゑもこゑもこゑ
春の物しくあはれきしうの月やう
しく書るんこすまと人住所のうも
わるぬるうなる沖のかぜ毎にて
一夜寝るうり市にうひとくこのうち
かうこうよ所のわくしもあめは
もくまくまくまくまくまくまくまくまく
月をまうなるうる時しもあもと逢るる



事のこうふくこうるとこく
我をすこうあるうる雨
うよ所のうなるうり
見をこくぬうよ所の長物を
さうしくうあるのとうわ
なうらはあうるりいて有うん
ひほうのけうや肩のうへうり
こうむすわまそこの毎のうら
もいうをくうるこうれいすこう
こうやとめんこ童ひらくしはうり
の物わるくこうるるみわうきく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六とせとなるまでふるかぶ事とはの
なれる事のなかにぬそてにうつりぬむ
うつりかはりうたは塩つ泉水ちろ
とはくく事まうしへとぶらう
ものさ人さんつの板し事ゆへ
をとゆきもしつまきの
ちくれ人神をとんぬ
石わるさをむしの物ふるうへ
いりおりしるきれたうはく
事みちくひかの事いちをあるえ



是よりそいうかんをそこの人をえを
よりうるきる種しわをは芸
もやとなるあらもそこうきる
あるのるくくうるをうかるわをうう
くまちをるくやあるやる
しやくはつうるきたる
うるのうちる屬つ声うやく
う稽つうしるおうしく
船人のこをそむるをうく何
事をえもきてぬうをうはは
清るもやるをしるうちはうする屬

く晴ゝとして秋やまさるは面白
沖のうゝよりあれもうらめる島々へ
やうちかくりくゝとまめ汁や
とゝるゝ面白ゝ秋くゝとその日言
くれくゝわら濤ゝ毎代ゝくゝ今秋も
月のおしかりゝ濤ゝたゝいてゝ船
しゝゝかゝゝよ自ゝ濤ゝ
清ゝ秋ゝゝよゝゝまゝくゝ
くゝ海ゝゝいゝする光ゝ
てゝわのゝゝや海人乃里ゝん
海ゝゝゝ家ゝはゝくゝ

ゝ柱ゝゝくゝ櫓ゝゝゝ
物ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝる蓬ゝゝゝゝ
わくゝゝゝ光ゝ
ゝるゝゝゝゝ
見ん月のゝゝ
ゝゝゝゝゝ
海ゝ海くゝゝ真ゝ
ゝゝゝゝゝ
人海ゝの月ゝ
ゝ網乃ゝ

とのゝりのとやわまつ月らん
ゝゝおもゝゝひの後まゝゝ梅花
後ゝゝ社ほすゆゝゝえんてゝく
ゝゝゝ月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
船のうち後つゝゝゝゝゝゝゝゝ
風よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つみゝゝ弄ゝ一門つゝ卿度上人石
内侍以下ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

又ゑのかな紙京氣こゝろより彼社頭に
西おもてく海邊のかゝり戒定恵の
菊うへ四季をくさ〳〵ゝ植ちまを
しれ松神さびしとゝろとゝろへる愚
詠一首はまをすかしをとゝり
しとゝのゝ四方にうゑられく
はひるくやに九月紅葉き
情多しうゝ四五日わらうる
うくゝ藤さいたらい
いろくゝ見えやとゝれてわら
しきゝわらへ人ゝ多きゝ



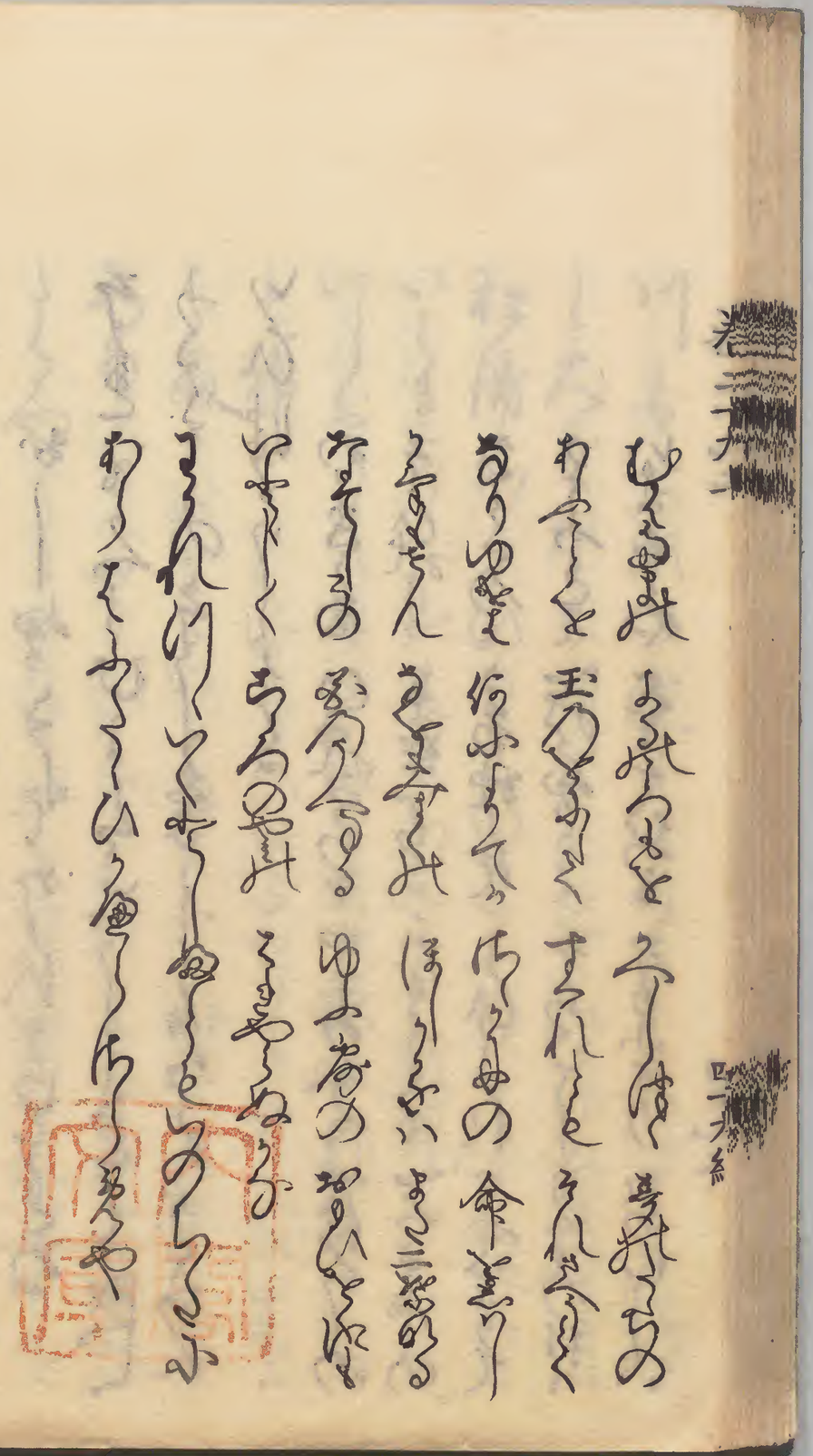
ゝ。わ毎ゝ代いく。今ゝゝしかゝ
きゝゝくれもゝ常に年に
いゝひくさゝりのゝゝる。
四ゝにゝろう舟ゝ色浦
ゝゝおはくす。又嵯峨のおゝ住ひ
宰府ゝいゝ四ゝ
ゝくゝいゝ三置わりやわれ
らんゝ涙ゝゝ紅ゝ。おゝん
ゝんゝ紅ゝ
わゝゝゝ
ゝゝ深川を其ゝ

そもしりぬれもせぬ川
なれもせぬ
なかりよいわの神見ぬ
しらぬ彼いせ
しもをくわ
と海をなめくこ人の言葉のまこと
もわくこれくゆ
つくこ柳金山のおりまく
しりそやこれくこ家を郭公
こくこるめ
道のりてもひこりく思て宮こ一日
二日わるくく名後屋よりまれて

こらすこのこ家にもこ
もくこ色そいよのこ
いここる半わり太事所隆家蔵常
くこ書こる時扇ましをまして枇杷
大后文源さいこれ松くせ
こくこおくわれる海こる前人をゆ
すくく名所こ
いるからく松い濃京乳海らく
かこわりくこ
くこる場地より玉造川松浦川何も
やう海なこと
いくこ
る書浦

川を七瀬の淀とよめるよたるべし
と大ぶなる川をくそわりて彼
松浦佐ひめのひれふりしをそ
いまきえんとも[illegible]
いつもうきさをなるとて錦の神といへる人
と都にくるりひがしにいたて
そをうめくいるをりをしかの
ちあくるせしをたれかの家をうし
くるやうをほくいとすれをりを
をのの日石蔵屋にいらりくをよう
ひとひさしひうかりぬるはは

しきをは一聲とうきくるをれと
ほときをは初音きくいるをあく
おしをるをなををとをぬ
をををを







拾遺抄巻第二十九上終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan